

## 小児科後期研修の紹介

### <当科の特色>

当院では現在、常勤医 6 名と研修医 1 名、および非常勤医 2 名で小児科診療にあたっています。一般小児科診療に加えて、専門領域として、アレルギー疾患、循環器疾患、神経疾患、血液・悪性腫瘍、内分泌・代謝疾患、膠原病に対応しています。

### <小児科スタッフ紹介>

名前	役職、地位	専門	卒業年
南部 光彦	部長 (小児科、小児アレルギーセンター)	アレルギー疾患	S 56
松村 正彦	部長 (小児科循環器センター)	循環器疾患	S 53
三木 直樹	副部長 (小児科)	神経疾患	S 61
岡田 雅行	医員 (小児科)	血液・悪性腫瘍	H 6
吉村真一郎	医員 (小児科循環器センター)	循環器疾患	H 8
佐野 史絵	年俸嘱託 (小児科)	膠原病	H 15
芝 剛	研修医 (小児科)		H 18
山中忠太郎	非常勤 (小児科)	内分泌・代謝疾患	S 57
加藤 竹雄	非常勤 (小児科)	神経疾患	H 6
太田 茂	院長代行 (小児科)	(病院管理)	S 46



前列左から佐野、松村、南部、岡田、後列左から三木、芝、吉村

### <各専門分野について>

★アレルギー疾患：担当 南部（日本小児科学会専門医、日本小児科学会近畿地区代議員、日本アレルギー学会認定指導医、日本アレルギー学会代議員、日本小児アレルギー学会理事、小児気管支喘息治療・

管理ガイドライン作成委員、日本小児難治喘息アレルギー疾患学会理事、2008年第25回日本小児難治喘息アレルギー疾患学会会長、2009年第7回ダウン症療育研究会会長、日本周産期新生児医学会認定周産期新生児指導医（暫定）、天理地区医師会理事、奈良県地域医療等対策協議会小児医療部会委員など）

2001年9月に小児アレルギーセンターを開設し、喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、アナフィラキシーなど、多くの患児を診療してきました。小児気管支喘息の長期管理においては、環境整備に重点を置き、それでコントロールできない場合には、長期管理薬を導入しています。喘息の管理にはピークフローメーターや呼吸機能検査、アストグラフ法による気道過敏性試験を取り入れています。食物アレルギーの子どもには食事療法を行い、外来や入院で適宜、食物負荷試験を実施しています。アトピー性皮膚炎の子どもには環境整備とスキンケアを指導しています。外来での指導を補うために、管理栄養士や看護師など、病院のスタッフとも協力して、年3回のアレルギー保護者教室と、年に1回のちびっこぜんそく教室を開催しています。

第1回：アレルギーについて、

第2回：掃除のしかた

第3回：ちびっこぜんそく教室

第4回：食物アレルギーについて

★循環器疾患：担当 松村（日本小児科学会専門医、日本小児循環器学会専門医、日本小児循環器学会評議員）、吉村

主に先天性心疾患の診療を行っています。心臓カテーテル検査を随時行い、心臓血管外科と連携して、複雑な心奇形の治療に好成績をあげています。また胎児エコーを行い、先天性心疾患の早期発見、早期管理を心がけています。成人先天性心疾患の患者さんも数多く診療しています。

★神経疾患：担当 三木（日本小児科学会専門医）、加藤（日本小児科学会専門医）

当院小児科は長年に渡って小児神経疾患の診療に力を注いでおり、数多くの患者さんを診療しています。脳波検査やMRI、SPECT、神経伝動速度、筋電図検査なども充実しています。

★血液・悪性腫瘍：担当 岡田（日本小児科学会専門医、日本血液学会認定血液専門医）

小児血液疾患や悪性腫瘍の専門診療を行っています。症例は豊富であり、白血病・悪性リンパ腫などの造血器悪性疾患は年平均5～6例で、地域の症例を紹介していただいています。当院はJPLSGおよびJACLS参加施設であり、エビデンスの高い治療を行っています。重症例については経験豊富な京都大学小児科血液腫瘍グループの指導を仰いでいます。一方、造血幹細胞移植や腹部外科手術には対応できないため、難治例や腹部腫瘍症例は京都大学や大阪の高度専門施設へ紹介しています。

★膠原病：担当 佐野（日本小児科学会専門医、横浜市立大学病院小児科で2年間研修）

膠原病患者さんは多くはありませんが、日本の小児膠原病診療の最高峰の病院での経験を基に、堅実な診療を行っています。

★内分泌疾患・先天性代謝異常症：担当 山中（日本小児科学会専門医、日本内分泌学会認定内分泌代謝科（小児科）専門医）

対象となる内分泌疾患は、下垂体性小人症（成長ホルモン分泌不全性低身長症）、ターナー症候群、軟骨無形成症を中心とする成長障害、甲状腺疾患（先天性甲状腺機能低下症やバセドウ病）、思春期早発症、先天性副腎皮質過形成症、性腺機能低下症、糖尿病など多岐にわたります。疾患の性格上外来診療の比重が大きい領域ですが、糖尿病、副腎皮質過形成症、甲状腺機能亢進症など初期治療は入院でおこなっています。近畿小児内分泌研究会、日本小児内分泌学会等に積極的に参加し、Up to Date な知識を診療に還元しています。またそれらの会を通じた協力関係は全国に及びます。

先天代謝異常症については、京都大学、大阪大学、大阪市立大学等と連携していますので、特殊な検査や最新の治療を行うことができます。先天代謝異常症の多くは食事療法が不可欠で、当院でも栄養部の協力を得て実施しています。また、新生児スクリーニング検査は福井大学に協力し、タンデムマスを使用した新しい検査を並行して実施しています。

内分泌疾患、先天代謝異常症ともに小児から成人へのキャリアオーバーが重要です。実際、両領域共15歳で小児科卒業ではなく、成人するまであるいは成人してからも通院を続けている方がおられます。1人の小児患者さんが成人するまで見届けることができ、小児科冥利につきる領域です。

★新生児・未熟児

当院ではNICUはなく、未熟児や重症新生児は、奈良県立医大などへの搬送を行っています。当院で行うことができない未熟児や重症新生児の研修は、奈良県立医大病院や京大病院などのNICUで行っていただきます。

★救急

奈良県北和地区の小児二次救急に輪番で参加しています。小児救急研修を希望される方は、院外研修も可能です。

★院内学級（小学校、中学校）を設置し、入院患児の学習の援助や退院後の学業にも配慮しています。

### <塩見夏子医師シニアレジデント経験談>

私は小児専門病院で2年研修後に、シニアレジデントとして赴任してきました。小児科勤務の他、内科ローテーターを6ヵ月、またジュニアレジデントの指導と救急外来診療を行いました。

小児科は小児循環器、内分泌、アレルギー、血液、神経の専門外来があります。単心室などの心疾患、糖尿病、AML、痙攣重積や脳症などの重症患児から、肺炎や喘息などの急性期疾患の患児まで、幅広く担当させていただきました。ここでよかった点は、地域の中で中核を占める病院で、診断から始まって治療、果ては看取りまで、患者さんをじっくりみることが出来たことです。

印象深い例を紹介します。新生児期に哺乳不良で入院、2歳まで生存できるかどうか分からない神経疾患重症と診断しました。根本的な治療方法がなく、家族と良く話し合い、気管切開を行い、長期入院の末に在宅人工呼吸に移行しました。ご家族が本当に患児を大切に思われている中で、医療者として何ができるか？多くのことを教えていただいた児とご家族でした。

救急外来では内科、外科を問わず対応に当たりました。普段小児科ではめったに診ない CPA や脳出血、消化管出血、AMI などを経験したことで、小児の急変への対応を学ばせていただいたと思います。もちろんわからないことは先輩や同僚のシニアレジデントに教えてもらうことが多かったです。

医局はシニア、ジュニアレジデントで構成されており、教えたり教わったり、飲みに行ったりしていました。ジュニアレジデントへの教育の中で自分の知識の整理や足りない部分への認識が深まったように思います。

ただ仕事ばかりではなく年に1回はしっかり休み、バリやケニアなどに海外逃亡していました。忙しい毎日ですが充実した3年間でした。

